ISSN 1341-1330

さいたま市立浦和博物館館報

あかんさす

VOL. 39-2
通号 第101号

ACANTHUS : BULLETIN OF SAITAMA MUNICIPAL URAWA MUSEUM

「三室地区定例探鳥会」が300回を迎えました

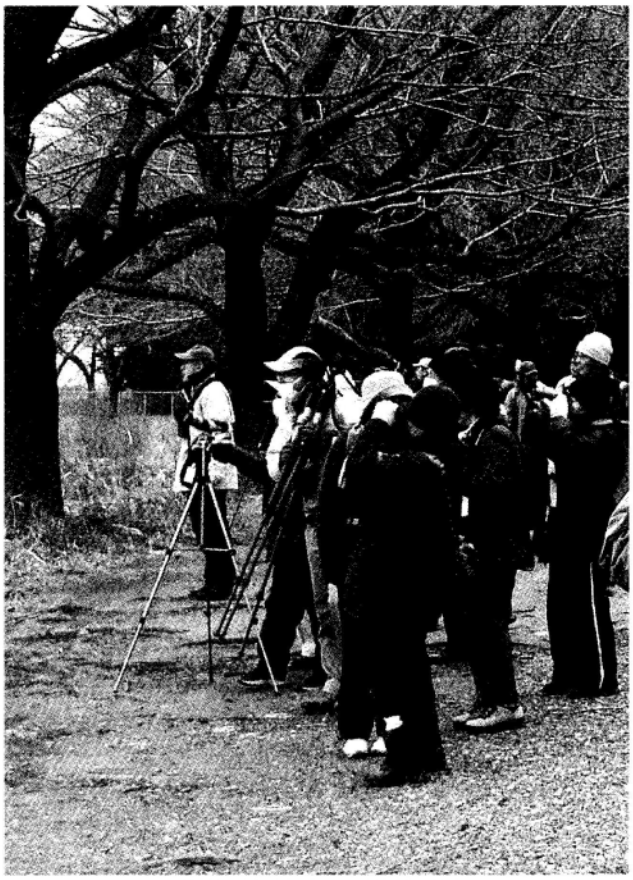
当館と日本野鳥の会 埼玉が毎月開催している「三室地区定例探鳥会」が、去る平成23年（2011）２月20日、第300回を迎えました。当日は冬の寒さの残る曇り空の一日となりましたが、118名の方々のご参加をいただき、２グループにわかれて楽しく野鳥の観察を行うことができました。

「三室地区定例探鳥会」のあゆみ

浦和博物館では、開館以来、地域の歴史・文化とともに自然に関する調査・研究を行ってきました。その一環として、昭和59年（1984）５月より、日本野鳥の会埼玉県支部（現日本野鳥の会 埼玉）の皆様による「三室地区定例探鳥会」を、毎月第３日曜日の午前中に開催しています。

開始から28年の間に蓄積された毎月の観測鳥の記録は、見沼の環境の変化を表す一つの指標として貴重な存在です。日本野鳥の会埼玉が主催している探鳥会の中でも、熊谷市大麻生地区とならび、最も長い期間にわたり続いています。

探鳥会では、野鳥の会でリーダーとして活躍する方々が、参加された方々を案内し、野鳥に関してはもちろんのこと、見沼の動植物や生態系についても紹介や説明を行っています。リーダーのアイデアで、初心者の方には黄色いリボンをお渡ししています。これを付けている方にはご案内や望遠鏡による観察を特に丁寧に、優先して行うというもので、日本野鳥の会を通じて全国の探鳥会へも普及しているようです。



見沼代用水沿いでの観察

■ 目　次 ■

「三室地区定例探鳥会」が300回を迎えました…… 1
特別展関連講座「見沼の開発史」を開催しました…… 3
企画展「夏休み子ども博物館」・「ちょっと昔のくらしの道具展」…… 4

三室地区定例探鳥会 300回を迎える！

楠見　邦博（日本野鳥の会 埼玉　メインリーダー）

1984年５月20日から2011年２月20日、毎月第３日曜日に、鳥を通して、人々の語らいがありました。26年９ヶ月間の参加者は延べ１万７千人弱、毎月の参加者は約56名になりますが、人々のこころに、見沼たんぼの移り変わる四季の風景を背景にして、鳥たちの愛らしい姿や優雅な姿を刻んで来ました。これからも、鳥をメインにして、老若男女、打ち揃い、見沼たんぼの風を楽しみたいと思います。ぜひ、これからも三室探鳥会へお出かけ下さい。

コースの説明

芝川の土手で観察

探鳥会のようす

当日は朝８時半頃から準備と参加者の受付を始めました。続々と人が集まり、説明を始める９時ごろには、博物館の前は人でいっぱいになりました。この日の参加者数は118名でした。

人数が多いので、コースを二つに分け、それぞれ芝川の上流側と下流側をまわることにしました。リーダーから経路や見られそうな鳥についてなどの説明を受けて、９時半ごろ博物館を出発しました。

冬季は、カモ類など水辺で暮らす渡り鳥が多く見られるので、芝川の土手を中心としたルートで観察を行いました。観察のしやすい場所ではしばらく立ち止まり、望遠鏡を置いて鳥のようすをじっくり観察します。倍率の大きな望遠鏡をのぞくと、遠くの鳥でもはっきり特徴を見ることができます。それぞれの鳥の特徴や生態、見つけ方や見分け方などについては、リーダーの解説を聞くことができます。

約２時間で予定のコースを一周し、博物館に戻って「鳥合わせ」を行います。一覧表を使って、その日見ることのできた鳥を全員でチェックします。この日はあわせて40種の鳥を見ることができました。

普段はここで解散ですが、今回は300回記念ということで、日本野鳥の会　埼玉の海老原副会長、当館館長などが、挨拶や探鳥会の歴史についての紹介などを行い、節目を祝しました。

定例探鳥会は、今後も毎月第３日曜日の午前中に開催を続けていきます。今後とも、皆様のご参加をお待ちしております。

この日確認された鳥

カイツブリ	ヒドリガモ	キジバト	ジョウビタキ	アオジ
カワウ	ハシビロガモ	カワセミ	アカハラ	オオジュリン
ゴイサギ	オオタカ	コゲラ	ツグミ	カワラヒワ
ダイサギ	ハイタカ	ヒバリ	ウグイス	シメ
マガモ	クイナ	ハクセキレイ	シジュウカラ	スズメ
カルガモ	バン	セグロセキレイ	メジロ	ムクドリ
コガモ	オオバン	ヒヨドリ	ホオジロ	ハシボソガラス
オカヨシガモ	イソシギ	モズ	カシラダカ	ハシブトガラス

特別展関連講座「見沼の開発史」を開催しました

平成22年（2010）11月28日㈰、浦和駅東口駅前「コムナーレ」内の浦和コミュニティセンターにおいて、特別展関連講座「見沼の開発史」を開催しました。講師には、東洋大学国際地域学部教授の松浦茂樹先生をお招きしました。松浦先生は、「埼玉平野の成立ち・風土」（埼玉新聞社刊）などの著作があり、埼玉県をはじめ関東一円の治水や開発の歴史に深い造詣をお持ちです。

講演要旨

ご紹介いただきました松浦です。今日は、市民の皆様に、見沼について色々なことを知っていただけるようにお話をいたします。

●埼玉平野の開発

埼玉平野は台地の部分と、利根川と荒川が土砂を堆積させてできた低地の部分で成り立っています。低地では、利根川や荒川の氾濫でできた自然堤防が発達しているのが特徴です。また、埼玉平野は、「関東造盆地運動」という地殻変動によって、平野の中央ほど標高が低くなっています。この地殻変動は今も続いています。

埼玉平野での氷川神社・香取神社・久伊豆神社・鷲宮神社の分布状況を見ると、これらの神社が、古代から中世の武蔵国と下総国の境や、足立郡と埼玉郡の境に沿って分布の範囲を分けていることがわかります。これが意味するのは、埼玉平野の開発が古代から連続的、継続的に行われてきたということです。大規模な治水工事や新田の開発は江戸時代以降に行われたのですが、それまでの開発の積み重ねがその基盤になっています。

●見沼溜井の造成

寛永６年（1629）に、伊奈半十郎忠治が見沼溜井をつくったといわれています。溜井がつくられた要因には、同じ年に伊奈忠治が行った、熊谷の久下での荒川の締め切りがあると考えます。荒川を今の荒川の方へ付け替えると、今の元荒川に流れる水が減り、農業用水が不足するので、江戸川から中島用水を開削して元荒川下流の瓦曽根溜井へ導くとともに、元荒川から綾瀬川への分流を締め切りました。綾瀬川の水量も減るため、こちらでは見沼溜井を増強して綾瀬川沿いの地域の水源としました。見沼はそれ以前から用水源として使われていたようなので、伊奈忠治が行ったのは溜井の整備、増強であると思われます。

講演風景

元荒川や綾瀬川の周辺では、こうした水を水源とし、また綾瀬川などを排水路として整備することで、寛永年間（1640年代）ごろ多くの新田がひらかれました。

●見沼溜井の実力

見沼溜井には大きな川は流れ込んでおらず、深さもあまりないので、給水能力はあまり大きくありません。見沼溜井のかんがい面積は5000町歩といわれていますが、見沼の面積（1200町歩）と水深（３尺≒90.9cm）から計算すると、5000町歩に対して210mm程度の貯水量しかありません。稲の生育に最低限必要な水の量は一日６～７mmですので、旱魃のときは30～35日しか水がもたないことになります。田植え時にはさらに100～150mmの水が必要なので、これでは水が足りません。

●見沼代用水路の整備

見沼の水不足を解決するために、利根川から水を引いてくる、全長約90kmの「見沼代用水」が、紀州出身の井沢弥惣兵衛為永によって享保13年（1727）に作られました。この工事は、井沢弥惣兵衛が初めて現地を見てから３年、実際の工事は半年という短い期間で完成しています。

なぜこのような短い期間で完成したのかと言えば、それ以前から様々な問題に対する解決策がつくられていたからに他なりません。

当時の問題のひとつは、星川をめぐる忍領と騎西領、岩槻領の間の対立です。騎西領の用水は星川に設けた堰から取り入れていましたが、忍領では堰があると星川への排水が難しいためこれを撤去したいと考え、一方で星川と元荒川両方の水が集まる岩槻領は、堰を外されると水害が激しくなるためこれに反対していました。関係する村々では協議の上、元荒川の水を見沼溜井へ導水する「見沼代用水」を開削し、見沼溜井の水不足を解決し岩槻領の水害を防いだ上で堰を外す、という計画

を、延宝元年（1673）に幕府（関東郡代伊奈半左衛門）に願い出ています。さらに元禄14年（1701）には、騎西領用水を星川ではなく利根川から直接取るようにするという計画も加わっています。

井沢弥惣兵衛が行った工事は、見沼代用水の水源を元荒川から利根川に変更した以外は、ほぼこれらの計画に沿っていると言えます。

伊奈氏が行った工事を関東流、井沢弥惣兵衛が行った工事を紀州流と呼び、全く違うものとして説明される事も多いですが、そうしたときに挙げられる特徴、例えば関東流なら溜池による用水の反復利用、紀州流なら用水と排水の分離などは、実際の水利用形態の一部分です。実際にはどちらの時代にも、現場の状況にあわせて両方の方法を使っているので、関東流・紀州流と分けて考えることは適当ではありません。

●昭和30年代以降の土地利用の変化

昭和30年代以降、見沼田んぼでは土地改良工事が盛んに行われました。土地改良工事というのは水田の整備のことで、それまでの水はけの悪い湿田を、農業機械を使うことができる乾田に作り変えるものです。機械化で効率が上げられるため、農業経営にとっては当たり前といえる工事です。この土地改良が、見沼を水田から畑へ、また都市的土地利用へと転換していく大元になりました。

一方、昭和33年（1958）の狩野川台風で見沼田んぼは一面冠水し、下流の洪水を防いだことから、行政は見沼田んぼの都市化を抑える政策をとりました。昭和40年の「見沼田圃農地転用方針」、いわゆる「見沼三原則」です。これによって見沼は緑地として残され、現在も守られています。

●これからの見沼

見沼を世の中に対してアピールしていくためのシンボルが、何か必要ではないかと感じています。そこで私は、サギの集団営巣地を復活できないかと考えています。サギ山がなくなったのは水田の乾田化によって餌場がなくなったのが原因ですので、見沼の空き地に冬場も水を張って餌場とし、周辺の市街地に迷惑のかからない調節池の中などに営巣地を復活できないでしょうか。

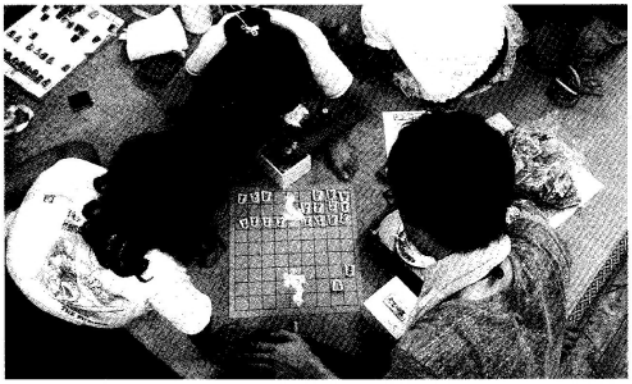
全国各地で、トキやコウノトリなど、サギ山と同じ頃に同じ理由で消えた野鳥を呼び戻す活動も行われています。見沼にも、サギの群れが舞う姿が戻ってくればと思います。

企画展「夏休み子ども博物館」・「ちょっと昔のくらしの道具展」

今年度も、小中学生の自由研究の参考としたり、学校の授業内容をさらに深く知るための企画展として、夏季の「夏休み子ども博物館」、冬季の「ちょっと昔のくらしの道具展」を開催しました。

夏休み子ども博物館

平成22年７月17日㈯から８月31日㈫まで開催しました。「さいたま市のあゆみ」「昔の道具・今の道具」「縄文人の顔」などのコーナーを設け、興味のあるテーマについて学習ができるよう展示を行ったほか、「見沼通船堀のしくみ実験」「クイズ大会」などの講座を開催しました。同時期に博物館実習を行っており、実習生が来館者と接して博物館経営について学ぶ機会ともなっています。



体験コーナー風景

ちょっと昔のくらしの道具展

平成22年12月18日㈯から平成23年４月10日㈰まで開催しています。展示室２階では、くらしの変化を現在と比較して感じることができるよう、明治時代から昭和40年代ごろまでの様々な生活の道具や、くらしの様子を納めた写真などの資料を時代ごとに展示しています。また、１階には、炭火アイロンや石臼などの道具を実際に使ったり、蚊帳の中でお手玉など昔の遊びを体験できるコーナーを設けています。

さいたま市立浦和博物館報　**あかんさす**　No.101
編集・発行　さいたま市立浦和博物館
〒336-0911　さいたま市緑区三室2458番地
TEL・FAX　048―874―3960
発　行　日　平成23年３月29日
ホームページ
http：//www.city.saitama.jp/hakubutsukan.html
E－mail　urawa-museum@city.saitama.lg.jp

この館報は2000部作成し、１部当たりの印刷経費は25円です。